

高松塚古墳の調査

—第 154 次

2008年度に引き続き、高松塚古墳の仮整備にともなう発掘調査を榎原考古学研究所、明日香村教育委員会と共同で実施した。今年度の調査は、機械室(保存施設1階部分)の撤去により再露出する昭和49年度旧発掘区の記録作業を中心とし、古墳築造以前の基礎造成や旧地形のあり方について重要な所見が得られた。調査期間は2009年5月18日～6月11日で、調査面積は約80㎡である。

旧発掘区壁面を再分層した結果、墳丘封土である版築層、7世紀代の土器片を含む整地土層、暗灰色の旧表土層、花崗岩バイラン土を中心とする地山層を再確認した(図168)。高松塚古墳では墳丘構築に先立ち、北側では丘陵斜面を平坦に開削するとともに、南側では古墳築造以前の谷を埋め立てていることがあきらかになっている。今回、確認できた旧表土層は20°前後の傾きで南に向かって下降しており、これが古墳築造以前の谷の西斜面にあたる。その上部を整地土が覆っており、厚さ0.3mほどの単位で粘質土が積み重ねられている。さらに、旧発掘区東壁面沿いに整地土を断ち割って谷の形状を追及したところ、墳丘南端から南に4.5mの位置で谷底部分を検出することができた。整地土の上面は、後世の開削により当初の標高を留めていないが、墳端付近の標高をそのまま南に延長して基盤面を復元した場合、谷底部分から盛り上げられた整地土の高さは2.7m前後に達する。



図167 機械室撤去後の高松塚古墳(南から)

また、旧発掘区西壁面では、整地土上層に焼土や炭化物を大量に含む層を確認した。同層内からは、土師器・須恵器片のほかに、表面に火を受けた痕跡のある榛原石が出土した。基礎造成の完了を目前にして何らかの火焼き行為がなされたことが示唆される。

なお、機械室はコンクリートを直接打ち込んで建設されており、旧発掘区壁面に沿って打設された奥壁部分を撤去すると、地震によって断層状の陥没が生じている墓道部が崩落することが懸念された。仮整備の外観上は全く支障をきたさないことから、奥壁は撤去せずに調査終了後にそのまま埋め戻されることとなった。(廣瀬 寛)

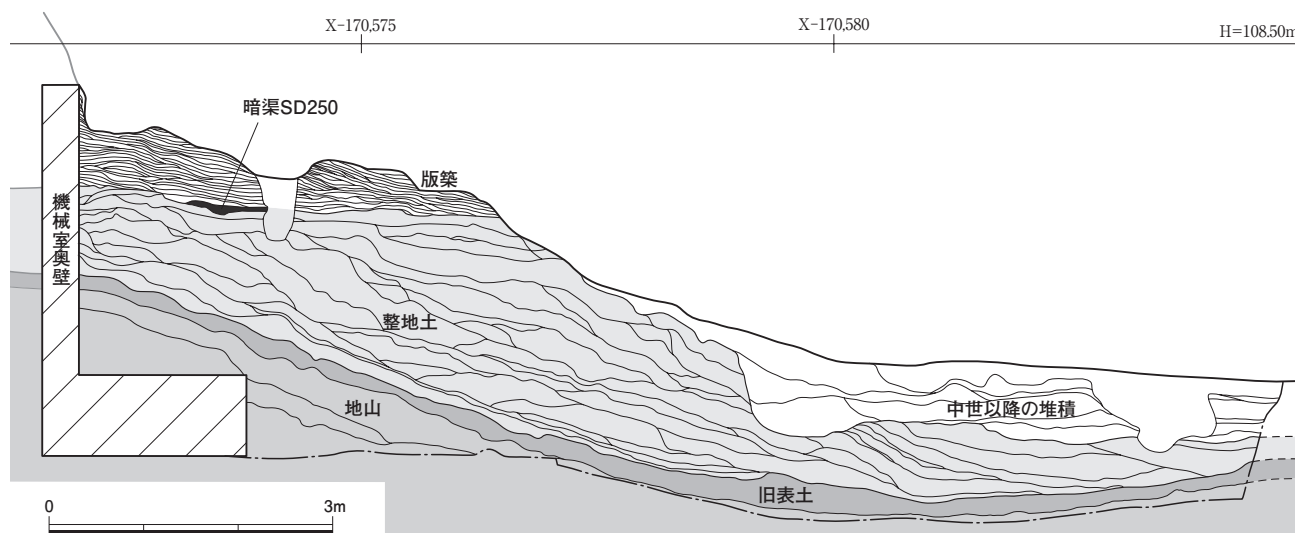


図168 旧発掘区東壁断面図 1:80



Ⅲ 平城宮跡等の調査概要